

Title	経済史の研究に就て
Sub Title	
Author	瀧本, 誠一
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1919
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.13, No.11 (1919. 11) ,p.1460(74)- 1483(97)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19191101-0074">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19191101-0074</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 經濟史の研究に就て

瀧 本 誠 一

經濟學の原論若くは其の特殊問題に關する立派な著作は今日續々と出版せられ、汗牛充棟も嘗だならざるの盛況なれども、日本の經濟史に至つては遺憾ながら一ツの纏りたる大著作の現はれたることなく、學界偏へに寂寥の感なきにあらず、從來亞細亞協會雜誌若くは其他一二學會の雜誌等に於て、歐米人が我國經濟史の或る一節に就きて研究したる結果を公にしたるものなきにあらざるも、是れとても概ね區々たる斷編にして組織的の經濟史にあらざるのみならず、其の斷編すら多くは學者の手中に成りたるものにあらずして、宣教師醫者など全く經濟學の素養なきものが其の見聞のまゝを叙實的に記したるものに過ぎるのである、然れども現在外國人にして我が日本の經濟史に興味を有するものは尙ほ比較的多い方であつて、中には我々をして往々感服せしむる事なきにあらざるも、肝心の日本人にして自國の經濟史らしき經濟史を書きたるもの、殆んど皆無の姿なるは是れ將た何等の欠點ぞや、我々學界に生活するものは心私かに赧然たらざるを得ないのである。

故「ウィリヤム・メートランド」氏は英國著名の法家「チャーレス・エルトン」氏が曾て英國史學雜誌に於て、後來英法史を書くの功勞は恐らくは獨逸若くは米國に於ける古實學者に歸するならん、我が英國に於ては何人も之に着手するの忍耐と學識とを有せざるべしと云へるの言を引用して、此の言必ずしも當らずと云ふにあらざるも、我が英國とても此の問題に就きては、今後決して望みなしと云ふ可らず、現に既往に於ても實際多大の見るべきものありしのみならず、將來必ず大に成功するの時節到來することあるべしと云ふの主意を述べて「メートランド」論文集第二卷の首章參照英法史の資料の乏しからざるを證明し、以て必ずしも外國人の助力に待つ必要なきことを論じたりしが、余は今や日本經濟史の前途に就き、宛も「メートランド」氏と其の感想を同じふするものである。

されば我が日本の經濟史は近き將來に於て何人か率先して書ざる可からざる

のであつて、而かも必ず書かるべしと信するのである。故に余は茲に此の大業を成し遂げんとする學者其人に向ひ豫め之に對する二三の卑見を披瀝して參考に供せんと欲するのである。但余の主眼とする所は日本經濟史なれども、其の所論の多くは廣く一般の歴史を研究するものにも當て嵌まるべきことなれば、茲に使用する言辭は單に歴史とのみ記るして、往々廣汎なる普遍的の語を使用する場合なきにあらず、讀者其心して閱讀せられんことを望む。

(一) 經濟史の研究法は哲理的ならざる可らず

一般歴史の研究に就いて先づ第一に着眼すべきことは哲理的方式に依つて、社會進化の大原則を發見することを勉むるにあり、區々たる特殊の現象に拘泥して、社會の發達上古今に通じて一貫したる組織的の大原則あることを閑却するは眞の歴史を研究するものと云ふ可らざるのである。俗間に所謂歴史なるものは専ら帝王の言動生死、政治家若くは政黨の權力争、戦争の經過勝敗等を叙述するを以て其の眼目となし、社會進化の功程如何の如きは、殆んど之を度外に置くの傾なきにあらざるは、少なくとも近世に於ける眞の歴史の意味を了解するものにあらず、

例へば孔子の春秋、温公の通鑑若くは水戸の大日本史、栗山愿の保建大記の如きは皆是れ大義名分を闡明すると云ふ一定の見識の下に編述せられたるものなるべきも、其の實是等も亦東洋流儀の歴史であつて、見様に依つては或は一部の倫理史と見られざるにあらざるも、矢張文化の消長を明にし、社會の發達を記するの點に於ては、更らに何等の貢獻する所なくして、十八史略や國史略など、少しも異なる所ないのである。今日の學界には眞逆か斯くの如き固陋の見解に依つて、歴史の研究に従事するものなかるべきも、之を以て帝王若くは政治家の個人的傳記の如く思惟して、歴史の眞價を發揮することを知らざる者多きは余の甚だ遺憾とする所である。

社會の歴史は組織的の一體である。故に之を研究するには其の社會全體を一ツのものとし、其の各部に於ける機能の發達作用を明にして、全き生活の進化變遷を辿り、以て社會的傳記を審にするの覺悟なかるべからざるのである。而して我々の目的とする經濟史は社會の歴史中特に重要な地位を占むるものにして、アラユル大問題の背後には概ね皆經濟的利害の伏在するものなれば、之を研究するには、特

に其の眼界を廣くし、總ての方面に涉りて關係の索線を捉ふることに着目せざる可らざるのである。クリップ、レスリー氏が曾て各國民の經濟例へば男女兩性の職業、若くは其の富の性質、生産額、分配及消費等に關する總ての經濟現象は、其の國民の長き進化の結果であつて、之を支配する法則は歴史及社會の一般的法則中に之を求めざる可らざるのである……狩獵、牧畜、農業及商工業の發達段階は普通に之を目して、經濟的發達と稱するも、其の實は一般社會的の進化であつて、其の國民の倫理、知識、政治等各種の方面が經濟的方面と綜合混同して現はれたる顯象に外ならないのである云々(再版經濟論集一七五)と述べて、一國民の經濟的進歩はヘンリー、メイン氏の所謂 Status より Contract の世の中に移る大變遷と離るべからざる關係を有することを明にして、經濟學の哲理的研究法は此の一般的理法を説明するの一方法ならざる可からざることを論斷したるは、今日より之を評すれば、其の説稍や矯激に失するの弊なきにあらざるべきも、我々經濟史を研究するものは、其の大體の主意に於てはレスリー氏の社會的觀察に同意せざる可らざるのである。或る特殊の問題を捉へ嚴格に其の限域を守つて、之が專攻に従事するは、今日學

者の慣例であつて、必ずしも之を非とするの理由なきのみならず、他に何等かの目的あつて斯くの如くするは固より不可ならずと雖も、實は夫れをするにも、其の時代に於ける一般社會の大進潮を篤くと領解して、其の己れが研究しつゝある特殊の題目も、亦此の大進潮の一部分たるに過ぎざることを充分に心得居らざるは、折角の研究も無意味に終り、徒勞に歸するの虞れなきにあらず、例へば徳川時代に於て米價調節が行はれたと云ふことを思出し、之が研究に従事するときは、先づ其の時代に於ける一般社會の状態はドウであつたかと云ふ事に着眼し、當時の經濟は米の經濟であつたか、貨幣の經濟であつたか、政權を左右しつゝあつた階級は如何なる人々であつたか、國民一般の權利思想はどれ程の程度に進んで居つたか、運輸交通の狀況はドンナものであつたか、外國との通商往來はドウなつて居つたか、政治の良否、法律の完否如何など、云ふ諸問題を明かにして、此等の方面の關係を領解せざれば、當時米價調節の必要を感じたる動機は何であつたか、何故に其の實行が容易であつたか、又之を實行して果して何等の効果があつたか等の事は決して分らざる筈はないのである。故に此の米價調節と云ふが如き特殊の問題を取扱ふに

も唯だ其の事だけに没頭して、關係の諸問題少なくとも重大の諸問題を閑却して、孤立の研究を勉むるは、洵に無意味の事であつて、哲理的研究の主意に反し、學者の責任を全ふするものにあらずと信ず。

世人の知らるゝ如く、カーライルは歴史上社會の一般的進運の勢力を無視して、個人の勢力を過大に誇稱し、人間社會の運命は全く大政治家大豪傑の有無に依つて決せらるゝ如く思惟し、歴史を以て宛も個人の傳記の如く見做したる一人である。之れに反して、バツグルは個人の勢力を無視し、人間の運命を支配する歴史は物理的の法則の如く、人力にては到底之を奈何ともすべからざるのであつて、如何なる大政治家が現はれ、如何なる大豪傑が出づるとも、ソレは全く其の時勢が生み出したるものであつて、彼等は結局時勢其のものを左右する力はないと云つて、歴史に對しては殆んど宿命的の觀察を下して居るのである。而して此の二ツの見方は何れも極端に偏する僻論であつて、我々の取らざる所なるも、兎に角眞の歴史は狹隘なる個々特殊の問題にのみ跼促して居つて分るべきものにあらず、乃ち社會進化の大原則を心得居らざれば、史實の價值判斷は到底出來ないと云ふことを領解して居らねばならぬ。

ハートポール、レッキイ氏は其の著「歴史の政治上の價值」と題する小冊子に於て、歴史の一般的關係を認め、個人の行爲の大勢力あることを説き、若しモハメッドが其の進路の當初に於ける小戦に於て陣歿したらんには、夫の人間種族の大部分に於ける信仰、道德、心理、法律、政治等の根本思想となつて、一千二百年の久しき間その特徴を陶冶しつゝ、あつた大なる唯一神教が「アラビヤ」に興起したと云ふことは信せられないのである。之に依つて思へばキボン氏が若し「チャーレス、マーテル」が「トルス」附近の大戦役に敗北したならば、「イズラム」の信仰(回教)が今日基督教歐羅巴と稱せらるゝ國々を壓倒し、其れが爾後數百年間、此の國々を支配したるなるべし」と推斷せるは恐らくは不當の事にあらざるべし(三三頁—三四頁)と云へるは、余も亦不可なりと爲さず、夫れは宛も日露の戦役に東郷大將が日本海に於てロジエストウエンスキーに敗れたらんには、今頃は東洋の天地は半ば露國の勢力に歸し、勿論ザーの帝國は滅亡することもなく、或は又歐洲の大亂も起らなかつたかも知れないのであると推斷せられざるにあらざるべければ、此の點より見れば、カーライル

の意見の如く、東郷大將の一言一行が歴史に重要な綱目にあらずとは云ふ可からざるのである、然れども人間社會の運命を支配する歴史上の事實としては、東郷大將個人の勢力に夫れ程の重きを爲すに足らざるのである、乃ち換言すれば東郷大將の言行は、人間社會に關して哲理的研究を必要とする程のものにあらざることは明白である、故に我々經濟史を研究するものが野中兼山がドウであつたとか、新井白石がドウの、上杉鷹山、松平樂翁がドウのと云つて、只だ其の個人の行爲を研究した所が、ソレは日本の經濟史を構成する材料の一小部分たるには相違なきも、個人の傳記その物は一事件一問題の知識と同じく、唯だソレ切りでは何等の用にも立ざるのであつて、誰れが豪い彼れが豪いと云つても、宛も俗間の講談に異ならざるのである、苟も學者らしき研究に従事すると云へばソナ淺薄の事を以て満足する譯には行ないなのである、須らく經濟史の哲理的研究法に依り社會の進歩發達の徑路を明かにして、個人の言行特殊の現象の關係價値を發見せんことを勉むべきのみ。

(二)日本の歴史は世界發達史の一部分と見ざる可らず

余は前に歴史を研究する者は特に其の眼界を廣くせざる可らざることを述べしが、茲に重ねて其の事を高調して、更らに一層の注意を喚起せんと欲するのである。

元來歴史は個々別々のものであつて、世界の各國は皆異なつた歴史を有するとは余の辨明を待たざる所である、併しながら世界文明の進歩は一ト筋であつて、人類發達の沿革は皆同一の軌道を辿り、同一の方向に嚮つて進みつゝあるのである、故に國々個々の歴史は其の文明の遲速發達の程度に隨つて各々異なりたる現象を顯はし、又其の複雑したる内外關係の差違に依つて多少の異同なきにあらざるも、要する所世界の歴史は悉く同じ事を繰返へしつゝあるのである、先進國たる甲國の經驗した事は後進國たる乙國の藍本となり、乙國の閱歷した事は丙國の先例となり、丙國の足跡は丁國の追隨する所となるが如きは畢竟皆進歩發達の原則に支配されて居るのである、曾て或る一流の學者は西歐の文明は白人種の外には發達すべからずとし、有色人種は到底近世の意味に於ける文明の恩澤に浴するの資格なしと論斷したりと雖も (Gobineau) の「人間種族の不平等參照」今や文明普及

の問題に就き、斯くの如く根本的に人種的差別の思想を有する者は少なくとも學界に於ては殆んど其の跡を絶たんとするのである。乃ち歐米諸國の歴史と、我が東洋の歴史と多少其の趣を異にするは、地理氣候の差、法律制度の差、風俗習慣の差等に淵源するので、東洋の人種が先天的に進歩せざる異質の元素を有するの結果であるとは認められないのである。故に東洋の歴史が歐米の其れと違ふと云ふは日本の歴史が支那の歴史と違ひ、英國の其れが獨逸の其れと違ひ、佛國の其れが露國の其れと違ふと云ふの意味に於ての違ひであつて、東洋の歴史が其の本質に於て歐米の其れと違つて居ることは無いのである。所謂國學者流の説に據ると、我が日本は皇統連綿たる帝國である、世界萬國に比類なき國體である、帝國の歴史は他の國々に異りたる一種特別の歴史であると云つて、輒もすれば此の筆法で例の「デモクラシー」又は「ソートンリズム」などを退治することが出來得べしと思惟するものも少なからざるのである。成る程皇統の億萬世に傳へて天地と渝ることなきは、日出度き限りなれども、國家の成立が特に日本のみ異りたる基礎の上に立つて居るものと信ずるは學說としては甚だ通用し難き意見である。帝國の進歩發達に關す

る歴史が世界の他の國々と全く別種の原則に支配されて居ると云ふことは到底維持し難き學說である。國學者流若くは之れに類する一種の政論家が常に絶叫しつゝ、國體なることは何等の事を意味するか、余の知り得ざる所なれども、國體は讀んで字の如く、國家の體制、即ち國家の構成及其の根本主義を意味するものとすれば、我が日本に於ては皇統が正しくして萬世一系であると云ふ明確單純なる事實の外、何等特殊の要素を有するものにあらず、憲法の明文はドウであつても、國家の權力の所在は何くにあつても、國家たる國家は日本も歐米も同じ事であつて、其の成立に欠く可らざる要素は世界各國普遍的のものたらざる可らざる筈である。故に我が日本に於て國體を云々して歴史の異なることを説かんとするは、全然無意味のことであつて、眞の歴史の異同は國體の如何に關するにあらず、文明の遲速發達の程度に起因する異同であつて、根本的に歴史の成立を異にするの差違にあらざること知らざるべからず、即ち我國の歴史を研究するには日本の歴史も亦世界の歴史の一部分にして、同一の原則に依つて支配されるものなることを覺悟し、怪しき神祕的の元素を加味せざらんことに注意することを要するのである。近く

之を事實に徴するに我が日本が明治維新の前後に當り、東洋の諸國に率先して銳意歐米の文明を輸入し、以て世界に於ける他の有色人種に向ひゴビノツの意見の如く彼等は二十世紀の文明を吸收するの能力なしと云へる僻説の誤まれることを知らしめたるは、世界人類の歴史上に於ける大貢獻である。云はねばならぬ、左すれば我が明治維新の歴史は單に王政復古の歴史にあらず、畏れ多くも明治天皇陛下御一代の歴史にあらず、明治政府に於ける有力なる政治家の勳功談にあざれば、勿論區々たる薩長士人の手柄話にもあざること、は明白であつて、ソハ乃ち世界に於ける人類發達史の一節として之を看察せざる可らざるのである。現に米使ペルリが浦賀に來舶したるは十九世紀の半はに於て歐米の各強國が世界の各方面に商權の爭覇戰を再開したる飛沫の一ツにして、取も直さず世界商業史の一部を形成するものであると云はねばならぬ、されば維新の改革は單に我が自國內の出來事の如くなるも、其の實は然らずして彼のペルリの渡來と同時に文明の空氣に接觸したる必要の結果であつて、宛も今日に於ける我國の勞働問題が世界の一大勢の一部分を爲せるが如く、維新の歴史は明かに世界の歴史の一片たるに過ぎないのである。

一國の歴史が世界の歴史の一部分なることは其の承繼關係 Sequence に立てる事實に就ては之を立證すること洵に易々たることにして、殊に近世に於ける世界交通の發達は着々として國境の障壁を破壊するの効果を來し、隨て世界各國とも何れも非常の速力を以て歐米の文明に同化しつゝあるの事實あれば、歴史は此の點に於て明かに一體となつて同一方針に向ふの實を示しつゝあるも、ソハ且らく別問題となし、其の駢立關係 Co-Existence に於ける現象に就て之を看察するも世界各國の歴史は前に既に述べたる如く決して孤立の特性を有するものにあらず、例へば我が日本及支那の如く農業を立國の本として尊重したる事は、西歐諸國に於ても時代を異にして全く同一の對象を目撃し得べく、莊園の發達が封建の基となり、封建が武士道を精神として廉耻の風を重じたる事も、東西洋與に其の軌を一にし、又マーカンチリズム時代に於ける自給自足政策の如きは世界何れの方面にも同様に行はれたる實例なきにあらず、其他政治法律經濟等何れの問題に於ても大抵文化の程度の同じき時代には同様の事實が行はれ、同一の現象を呈したるもの



であつて、此の點に於ても世界の歴史は殆んど一般に完全なる統一 Unity を保つて居ることを證明して餘りあるのである、即ち換言すれば、或る一國の歴史は其の國に於ける特殊の色彩を帶ぶるにあらず、世界共通の性質を有するものであつて、ドコ迄も孤立的に其の國限りの特徴を具備して居るものとは認め難いのである、乃ち地理氣候若くは民俗等の差違は各々其の國の歴史に向つて多少の異同を生ぜしむるの原因たるや疑ひなしと雖も、社會の發達に關する歴史就中其の最も重要な部分を占むる經濟史の如きは早晩皆與に同一進路に向つて同一現象を呈するのであつて、彼我の異同は單に時代の問題に外ならざれば、或る一國の歴史を研究するものは之を世界各國の歴史に對照比較して縱系にも横系にも、皆普遍的に脈絡の貫通しあることを知らざる可らざるのである、元來何れの國民にも愛國癖なるものあり、例へば我が日本が瑞穂の國を以て誇り、支那が中華國を以て高ふるが如きは何れの國民にも免かれざる通弊なれども、學者が學問研究の立場にあつて眞の歴史を研究するには出来るだけ其の眼界を廣くし、狹隘なる國境の外に逍遙して、一貫したる眞理の所在を探らざる可らざるのである、一國の歴史を特殊な

る孤立の歴史と認むるの危険は我が國維新前後に於ける所謂慷慨家者流の無謀なる行動に鑑みて之を察すべきである、當面の政治上の事は其の時の權略として必ずしも合理的なるを要せざるべきも、學問上に於ては斷じて斯くの如き狹隘なる考察を許さざるのである。

(三)經濟史を研究するには經濟原論の素養あるを要す

政治學の原理を知らざるものが過去の政治史を談じ、法理學の大體にも通せざるものが古代の法制史を論ずるは固より一顧の價值もなかるべきが、ソレと同じく經濟原論の素養に乏しきものが慢然と經濟史の研究に従事せんとするは余の斷じて取らざる所である、元來歴史に最も注意せざる可らざるとは材料の撰擇にあるので、其の研究の成功すると否らざるとは、全く此撰擇の適否にあつて存するのである、書畫骨董には自ら鑑定家なるものあり、其眞偽若くは時代の批判は此の鑑定家に信頼するの外なきも、鑑定家は必ずしも美術品の製作家にあらず、自ら書畫を善くし、蒔繪彫刻若くは製陶などに巧みなる者各々其の専門に屬する古美術品の鑑識に富めるかと云ふに、ソハ必ずしも然らず、鑑識家と美術家とは全然別物

であつて、古筆家は能書善畫の大家にあらざれば勤まらずと云ふ筈は決して之れ  
ないのである、故に此の理を以て推せば歴史家は歴史家として専門的に獨立して  
成功し得られざるの理由なきや明かなりと雖も、其れは一般の歴史學科に就きて  
は或は然かあるべきも、特に他の専門學の補助として、其の専門に屬する歴史の研  
究に従事するときには單に普通の歴史家たる態度に據つてその研究の目的を達す  
ること能はざるべきは瞭々火を視るよりも明かである、既に前に云へるが如く政  
治史の研究は政治學に通ずるものにして、始めて之に着手し得べく、法制史の研究  
は法理學に精しきものにして始めて之に従事し得べく、宗教史には宗教學の識見  
を要し、戰爭史は戰術の巧者に待たざる可らざるや固より辨を待ざる所である、然  
らば或る他の専門學科の一分科として何にか特定の歴史を研究するときには、先づ  
豫め其の専門學科の原理原則を充分に領解して、念頭常に其の學科の要求する所  
を心得居らざれば、其の材料の撰擇に於て往々取捨を誤るの恐れなきにあらず、他  
の學科は暫らく措き經濟學に於て特に此の闕陥を暴露するもの多きは余の屢々  
目撃する所である、例へば小山田與清、栗田寛、内藤耻叟諸氏の如きは何れも博學の

大家にして、我が經濟史上に貢獻せられたること多大なれども、近世的經濟學說の  
一端すら知られざる人々なれば、彼等の著作を披見する毎に我々をして隔靴搔痒  
の思を爲さしむること少なしと爲さず、Mc Culloch 會て Boeckh の著「雅典國家經濟  
論」を評し「本書は深き研究を積みたるものにして而かも最も價值ある著作である、  
唯だ惜むらくは著者の近世に於ける斯學の知識が其の古實(歴史)の知識に比例し  
居たらんには本書は我々が斯くあれかしと希望したる完全のものたりしならん  
に」と云ひしは(Literature 三五六頁)ボックの場合に適當するや否やは別問題となし、  
兎に角經濟史を研究するもの、頂門の一針たるべし。

余は日本の經濟史を研究せんとする者には特に原論の素養の必要を痛切に感  
ずるものである、日本の經濟史は其の材料甚だ雜駁なれば之を學問的に分類研究  
することは非常の難事である、若し初めより漠然として之に従事するときには何れ  
の方面に向つて着手し、何等の書類を調査すべきや殆んど五里霧中に彷徨するの  
趣なきにあらず、夫れは何故かと云へば、先づ第一には、政治經濟上の事は封建時代  
に於ては一切之を秘密にして、猥りに之を世上に漏洩することを許さず、洵に取る

に足らざる儀式上の事若くは教訓に關する事將た又武家武人の功名談等の外は  
何でも彼でも總て秘密の中に埋没せられ、他人には決して知らすまじ、外間には斷  
じて洩らすまじと腐心したる結果重要な書類の多くは燒棄若くは破毀して子  
孫に傳へしめず(是れ一難)其の稀れに存するものは舊家富豪の庫中に埋藏せられ  
て世上に出づるの機會なく(是れ二難)又偶々舊官衙若くは舊問屋などに保存しあ  
りたる記録類には甚だ重要なものありて、夫れ等の中には現に公私の圖書館に  
備へ置かれて一般の披閱に便せらるゝものなきにあらざるもコレとて多くは專  
門學者の手を経て完全に整理せられたるものにあざれば、一々之を點檢して所  
用の資料を搜索するは中々容易の事業にあらず(是れ三難)加之ならず所謂古文書  
は勿論のこと近くは維新前後の舊文書なども大抵無學なる俗人の手に成りたる  
もの多く、出鱈目の文字を使用し、難解の文法を以て記録しあれば、之を一閱して其  
の意を解すること甚だ難し(是れ四難)又經濟上に最も重大の關係を有する數字に  
關しては昔の人々は頗ぶる呑氣にして例へば一が二となり四が五となり、甚だし  
きは位が違つて居つても尙ほ一向平氣で、少も構はなかつたものである、故に同一

事件に關し二種の書類が其の數字に於て一致して居ると云ふが如きは殆んど稀  
有である(是れ五難)と云ふも過言にあらざるのである、サレバ今此等の困難を排除  
して忍耐に研究を事とするは非常の精力家に於てすら容易に爲し難き事にして、  
之が爲めには數日數個月の辛苦を徒勞に歸せしむるが如き場合も少なからざる  
のである、殊に不幸なることには我が學界には未だ日本經濟史の名稱に値ひする  
經濟史は一も存するなくして、其の研究に従事するものは範を先例に取るの便も  
なければ、獨自ら茫渺たる大海に進航して、當途もなく寶の島を探檢するに異なら  
ざるのである、去れば日本經濟史の研究は良し經濟學原理の素養ありても容易の  
事業にあらざるに況して此の素養なく、漫然と此の大海に艚出したらんには、夫れ  
こそ必ず材料の撰擇を誤り、無用無益の搜索に多大の勞費を徒糜し、却つて重要の  
資料を逸し去るの慮りなきにあらず、蓋し經濟學の原理を解せざる者は必ず無主  
義無定見に雜駁なる冗多の材料を蒐集して、結局其の始末に苦むが如き仕儀とな  
り、宜に従ひ用に応じて、其の材料を利用すること能はざるの不幸を経験すること  
なきにあらざるべし、是れ余が經濟史殊に日本の經濟史の研究を爲さんとする者

に、先づ豫め原論の研究に努力すべきことを勸告する所以である。

然れども茲に一ツの考慮すべきことは經濟學の原論は經濟史の研究に依つて始めて其の眞理を立證し得らるゝの場合である。斯學の原理原則として長く一般の信用を得たりしものが歴史的の研究に依つて其の學說の根底を覆へされたること少なからざるは近世に於ける學史の明證する所である。故に經濟史の研究に従事するに當りては先づ豫め原論の大體に通じ居らざる可らざると同時に、其の學び得たる原論が所謂先入主となるの弊竇に陥りて、其の狹隘なる範圍を逸脱すること能はざれば、原論の素養は却つて又歴史の經濟學上の利用を妨ぐるの危険なきにあらず、故田口卯吉博士は余の先輩である。博士が斯學の造詣に深き碩學であつたことは世人の承知する所である。然るに博士の經濟學說は全然「マンチェスター、スクール」の自由放任論に依つて陶冶せられ、頑として矯正すべからざる痼疾となり居たりしかば、其の平生大に歴史研究の趣味を有し、單に歴史家としても有数の大家たりしに拘はらず、博士は終生其の史實を經濟學說上に利用して「マンチェスター、スクール」の誤謬を發見するの機會を取られざしりは余の常に怪しみ且

つ遺憾としたる所である。畢竟斯學の大家であつて尙且つ斯くの如くなりしは先入主となりて、偏狹なる學說に忠實なりしが爲め、貴重なる歴史の忠告を耳にするの遑なく、隨て其の學說の改良進歩を妨げらるゝに至つたのである。故に學者の研究は最も平心虚氣にして、其の腦裡には少しの「自我」を存するなく、機會あらば常に其の說の改良進歩を心掛け居らざる可らざるのである。即ち換言すれば我々經濟史を研究するものは原論の研究に得たる結果を、史實に照らして常に其の價值判斷を事とするの覺悟あるを要するのである。

「我々の富は歴史的の富である。歴史的の原因に依つて現在のソレの如くなつたのであつて、總ての富は皆歴史的の痕跡を印して居るのである。土地が富の一ツとして尊重せらるゝ感念の背後には如何に長き歴史が存在するか、富の分配及物價の背後にも亦同しく長き歴史が存在するにあらずや、我々の全き國民經濟は歴史的の組織體である。乃ち此等は皆歴史に依るにあらずば説明すべからざるものである」と痛論したるはクリッスレスリーである。經濟論文集一七八頁、レスリーは歴史派の張本人なるが故に特に歴史に向つて過大の重きを置くの弊なきにあら

ざるも、兎に角經濟學の原論が歴史の光に依つて闡明せらるゝの多大なることは疑ひないのである。例へば斯學の根本思想たる單純なる富に就てもレスリー氏の云へる如く歴史的の觀察を度外しては研究は出來ないのである。一ツの時代に富の「カテゴリー」に入らざりしものが次ぎの時代に於ては最も重要な富となり、數十年前には千金を以て購ひ得ざりし重寶も、今日は一文半錢の價もなき無用の贅物となれるが如き實例は少なくないのである。欲望の發達、消費の變遷を知らざるものは到底需用供給の法則を領解すること能はざるは歴史派の勢力を蒙らざりし舊派經濟學の大家 Hearn すら明かに承認する所ならずや、加之ならず個人の生産力の消長は其の周圍に於ける社會の狀態及其國の制度如何に歸因すること多大なるは言を待たざる所なるが、學者をして其の然る所以を領解せしむるは歴史に外ならないのである (List: National Economy. matile 氏英譯一七九參照左れば經濟原論の研究と經濟史との研究は兩々相須つて離るべからず、乃ち其の一を研究せんとする者は必ず他の一を研究して之を自家の専門に利用することを勉めざる可らざるのである。

如上の三個條は經濟史を研究する者が主として心得居るべき重大の要件である。此の外細目に涉つて之を論述すれば尙ほ列擧すべきこと少なからざるも、要する所此の三要件を心得居つて念頭常に之を忘却せざれば其の努力の結果は相當に報ひらるゝべきや疑ひなけん、昔時漢の司馬遷は歴史を書くものは才、學、識の三長を兼備せざる可らざることを述べたりしが、今や余は經濟史家の心得べき如上の三要件を提唱して、學者の注意を喚起し、併せて大に歴史の研究に努力せんことを欲するのである。ハートポール、レッキヤ氏が夫の有名なる「英國十八世紀史」の著作に没頭して餘念なかりし最中に其の老友の *McCulloch* 氏はレッキヤ氏に向ひ「時事に適切なる緊急問題が目前に蟄集しあるに拘はらず、夫れにも頓着せずして、一心不亂に過去の歴史などを穿鑿して、人間の短き一生中、あたら貴重の時期を空費しつゝ、ある者の心理狀態が合點行かぬ」と揶揄したるは、固より一場の戲言なるべきも、此の迂遠迂濶なるレッキヤ氏なかりせば、十八世紀に於ける英國の政治經濟上の地位、及同時代と今世紀との歴史上の脈絡は自ら臆然として煙霧の中に鎖され居たるならん、余は日本のレッキヤ氏が近き將來に現はれんとを熱望するのである。